茨城県笠間市

峯崎遺跡

―福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2011

社会福祉法人木犀会
テイケイトレード株式会社
埋蔵文化財事業部

茨城県笠間市

峯崎遺跡

―福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2011

社会福祉法人木犀会
テイケイトレード株式会社
埋蔵文化財事業部

例　言

1　本書は、社会福祉法人木犀会の福祉施設建設に伴う峯崎遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は笠間市教育委員会の指導の下、テイケイトレード株式会社が実施した。
3　遺跡の所在地・調査面積・発掘調査期間・整理調査期間は、以下の通りである。

所在地	茨城県笠間市寺崎字峯崎 158 外
調査面積	329 ㎡
発掘調査期間	平成 23（2011）年　2 月　1 日 ～ 2 月 25 日
整理調査期間	平成 23（2011）年　2 月 28 日 ～ 5 月 30 日

4　現地調査、整理調査および報告書の編集は、望月大輔が担当した。
5　現場での遺構写真撮影は望月が行なった。
6　遺物の写真撮影は山内和夫が行なった。
7　遺構図は、阿部正男が修正・トレースを行なった。
8　遺物実測・トレースは、西垣真子、佐野一絵、下田陽子が行なった。
9　奈良・平安時代の遺物観察は、奥冨雅之（テイケイトレード株式会社）指導のもと、望月が行なった。
10 調査によって得られた資料は、笠間市教育委員会が保管・管理している。
11 調査組織は下記の通りである。

調査機関	テイケイトレード株式会社　埋蔵文化財事業部
代表取締役	荒川健司
調査担当者	望月大輔
主任技術者	阿部正男

発掘調査の参加者は、下記の通りである。（敬称略・五十音順）

青木　誠　浅野靖子　大山年明　小河原百合子　小瀬靖夫　小林哲生　小林良子　田口久美子
富田恒勝　袴塚恵美子　林ゆうこ　水村知記　宮野忠行　山崎幸子　横田忠利

整理調査の参加者は、下記の通りである。（敬称略・五十音順）

岩田知子　大野節子　鹿志村百合子　小山　充　佐野一絵　下田陽子　高野恒一　中島慶太
中谷美穂　西垣真子　濱田優巳　林　雅博　松本寛之　山内和夫　山中敏彦　吉田淳子

凡　例

1　遺構番号は、遺構確認段階で任意に001番から付し、整理段階において遺構番号の末尾に遺構種別に基づいた略号を付し遺構名とした。

2　光波測距儀（トータルステーションシステム）によって取り上げた遺物は、遺構毎に通し番号を001番から付した。

3　本書において用いた略号は、以下の通りである。

SI―住居跡　SK―土坑　SL―屋外炉　P―小穴　K―攪乱　BL―ブロック

4　調査区のグリッドは、世界測地系座標に準拠し、X＝43920.000、Y＝37925.000の交点を起点とした。

5　平面図は完掘状況を表し、必要に応じ上端・中端線などを記入している。

6　本書の図版の縮尺は、それぞれの図版に記したが、原則として遺構は1/40、遺物は1/2である。

7　遺構図版中のトーンの指示は、以下の通りである。

火床範囲　硬化面範囲　- - - - - - - 補助線

8　遺物図版中のトーンの指示は、以下の通りである。

黒色処理範囲

9　土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社）を使用した。

10 遺物観察表の項目、記載方法は『橋爪遺跡－道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書－』（テイケイトレード株式会社　2010）を参考にした。

11 遺物の観察表において、残存値は（　）、推定値は＜　＞で示した。

目　次

例言
凡例
目次
第１章 調査の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の経過……1

第２章 位置と環境
第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……3

第３章 調査の概要
第１節　遺跡の概要……5
第２節　調査の方法……6
第３節　基本層序……7

第４章 調査の成果
第１節　遺構と遺物
（1）旧石器時代……8
（2）縄文時代……8
（3）平安時代……15
（4）非抽出遺構・遺構外出土遺物……18
第２節　まとめ……20
抄録
写真図版

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成 22 年 9 月 14 日付けで社会福祉法人木犀会は、笠間市寺崎地内における「埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて」の照会を笠間市教育委員会に提出した。開発予定地は、周知の遺跡「峯崎遺跡」が所在することから、平成 22 年 9 月 16 日付けで試掘調査が必要である旨が回答された。試掘調査は、笠間市教育委員会が笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏に依頼して、平成 22 年 9 月 21・22 日に実施し、遺跡の所在が確認された。

社会福祉法人木犀会は茨城県教育委員会に対して、平成 22 年 10 月 1 日付けで文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と決定し、平成 22 年 11 月 19 日付けで工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、社会福祉法人木犀会はテイケイトレード株式会社に調査を依頼した。社会福祉法人木犀会・笠間市教育委員会・テイケイトレード株式会社は三者協定を締結し、試掘調査の結果に基づき、平成 22 年 12 月 27 日付けで文化財保護法第 92 条第 1 項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成 23 年 2 月 1 日から平成 23 年 2 月 25 日まで、発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成 23（2011）年 2 月 1 日～平成 23（2011）年 2 月 25 日に実施した。調査地点は峯崎遺跡とされる遺物包蔵地であり、本調査の目的は福祉施設建設に伴う埋蔵文化財の記録保存である。

現地調査

・平成 23 年 2 月 1 日―　重機による表土掘削作業及び人力によるプラン確認作業を開始。
・2 月　3 日―　表土掘削作業終了。遺構調査を開始。
・2 月 23 日―　全景写真撮影。
・2 月 25 日―　県による終了確認監査。現地調査完了。

整理調査

・平成 23 年 2 月 28 日―　遺物洗浄作業開始。
・3 月　1 日―　遺構図面トレース作業開始。
・3 月　4 日―　遺物洗浄作業終了。
・3 月　7 日―　遺物接合・注記作業開始。
・3 月 10 日―　遺物接合・注記作業終了。
・3 月 16 日―　遺物実測・トレース作業開始。
・4 月　1 日―　遺物実測・トレース作業終了。
・4 月　8 日―　遺構トレース作業終了。
・5 月 31 日―　報告書刊行。

国土地理院　2009「1：25,000地形図　笠間・徳蔵・羽黒」より作図

第１図　峯崎遺跡位置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

峯崎遺跡は、茨城県笠間市寺崎字峯崎 158 外に所在する。

笠間市は県中央に位置し、北は城里町と栃木県芳賀郡茂木町、東は水戸市と茨城町、南は石岡市と小美玉市、西は桜川市に接する。市域周辺には、八溝山系鶏足山塊の南部にあたる国見山や仏頂山などの山々が連なり、そのほぼ中央に笠間盆地を形成している。八溝山系の地質は、古生代の砂岩、粘板岩、チャートや第三紀の花崗岩などで構成されているが、盆地内の地質は第四紀の砂礫から成り、その上に関東ロームが堆積している。また、盆地内には国見山付近から流れ出る涸沼川がほぼ中央を南流しており、そこに周囲の山々に水源を持つ小河川が合流し、涸沼に注いでいる。

峯崎遺跡は、笠間盆地の北部、涸沼川を南に臨む寺崎台地上に立地する。本調査区は台地南縁にあたり、北西から南東に向かう緩傾斜地である。標高は 58.75 ～ 60.25m である。調査地の現況は畑地、雑種地である。

第２節　歴史的環境

ここでは、峯崎遺跡周辺の主な遺跡について概述する。

旧石器時代　峯崎遺跡周辺では、当該期の人間活動の痕跡を残すものは確認されていないが、笠間市内に目を向けると、本戸地区の石崎遺跡、本戸城跡において細石刃が出土している。また、上加賀田地区に所在する小組遺跡では 2000 点以上の剥片が出土し、当地での石器製作を類推させる資料として注目される。

縄文時代　笠間市内に早期から晩期までの遺跡が確認されている。本遺跡周辺においては、西田遺跡の調査が行なわれており、縄文時代中期から後期の遺構が検出されている。西田遺跡では、石鏃とその製作に伴う剥片類が多数出土している。

弥生時代　弥生時代に関しては、他の時代に比べると遺跡数は少なく、本戸地区の蔵後遺跡や、後久保遺跡などが挙げられる。中でも後期後半に位置付けられる遺跡が多い。

古墳時代　古墳時代の遺跡は多く、本遺跡周辺には、北に高野古墳群、北西に寺崎原古墳群がある。本遺跡の南西に所在する箱田うら山古墳では、墳丘測量とトレンチ調査が行なわれ、周壕を伴う前方後円墳であることが確認されている。

奈良・平安時代　本遺跡をはじめ集落跡とされる遺跡が、飯田地区や石井地区などに認められる。石井遺跡群では、円面硯の破片などが出土しており、当地における官衙的施設の存在が想定されている。

表１　峯崎遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な遺構と時代
01	赤沢口古墳	古墳（古墳）
02	飯田城跡	城館跡（中世）
03	蟹前遺跡	包蔵地（縄文）
04	飯田新谷台遺跡	包蔵地（古墳）
05	上代遺跡	包蔵地（縄文、奈良・平安）
06	杉谷津遺跡	包蔵地（弥生）
07	金久保遺跡	包蔵地（縄文、奈良・平安）
08	寺崎原古墳群	古墳群（古墳）
09	福田館跡	城館跡（中世）
10	指合遺跡	包蔵地（縄文、奈良・平安）
11	高野古墳群	古墳群（古墳）
12	鳥居戸遺跡	包蔵地（縄文、古墳、奈良・平安）
13	寺前遺跡	包蔵地（奈良・平安）
14	東藤太郎遺跡	包蔵地（縄文）
15	宣命台塚	塚（中世）
16	後久保遺跡	包蔵地（弥生、奈良・平安）
17	空久保遺跡	包蔵地（縄文、古墳、奈良・平安）
18	関宿塚群	塚群（中世）
19	大井神社東遺跡	包蔵地（縄文、弥生、古墳、奈良・平安）
20	大淵館跡	城館跡（中世）
21	大淵堀ノ内古墳	古墳（古墳）
22	大井神社遺跡	包蔵地（縄文、弥生、古墳、奈良・平安）
23	成田塚群	塚群（中世）
24	金井前東館跡	城館跡（中世）
25	金井前西館跡	城館跡（中世）
26	峯崎遺跡	集落跡（縄文、弥生、古墳、奈良・平安）
27	箱田うら山古墳	古墳（古墳）
28	愛宕台遺跡	包蔵地（縄文）
29	大淵窯跡群Ｃ	窯跡（奈良・平安）
30	大淵窯跡群Ｄ	窯跡（奈良・平安）
31	麓城跡	城館跡（中世）
32	大淵窯跡群Ｂ	窯跡（奈良・平安）
33	石井遺跡群	包蔵地（縄文、弥生、古墳、奈良・平安）
34	佐白坊寺院跡	寺院跡（中世）
35	大石邸跡	屋敷跡（近世）
36	笠間城主下屋敷跡	屋敷跡（近世）
37	笠間城跡	城館跡（中世）
38	時習館跡	藩校跡（近世）
39	川東遺跡	包蔵地（縄文、奈良・平安）
40	桂町遺跡	包蔵地（縄文、古墳）
41	上圷遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安）
42	馬廻遺跡	包蔵地（縄文、古墳）
43	鍛冶屋遺跡	包蔵地（奈良・平安）

国土地理院　2009「1：25,000地形図　笠間・徳蔵・羽黒」より作図

第２図　峯崎遺跡周辺の遺跡位置図

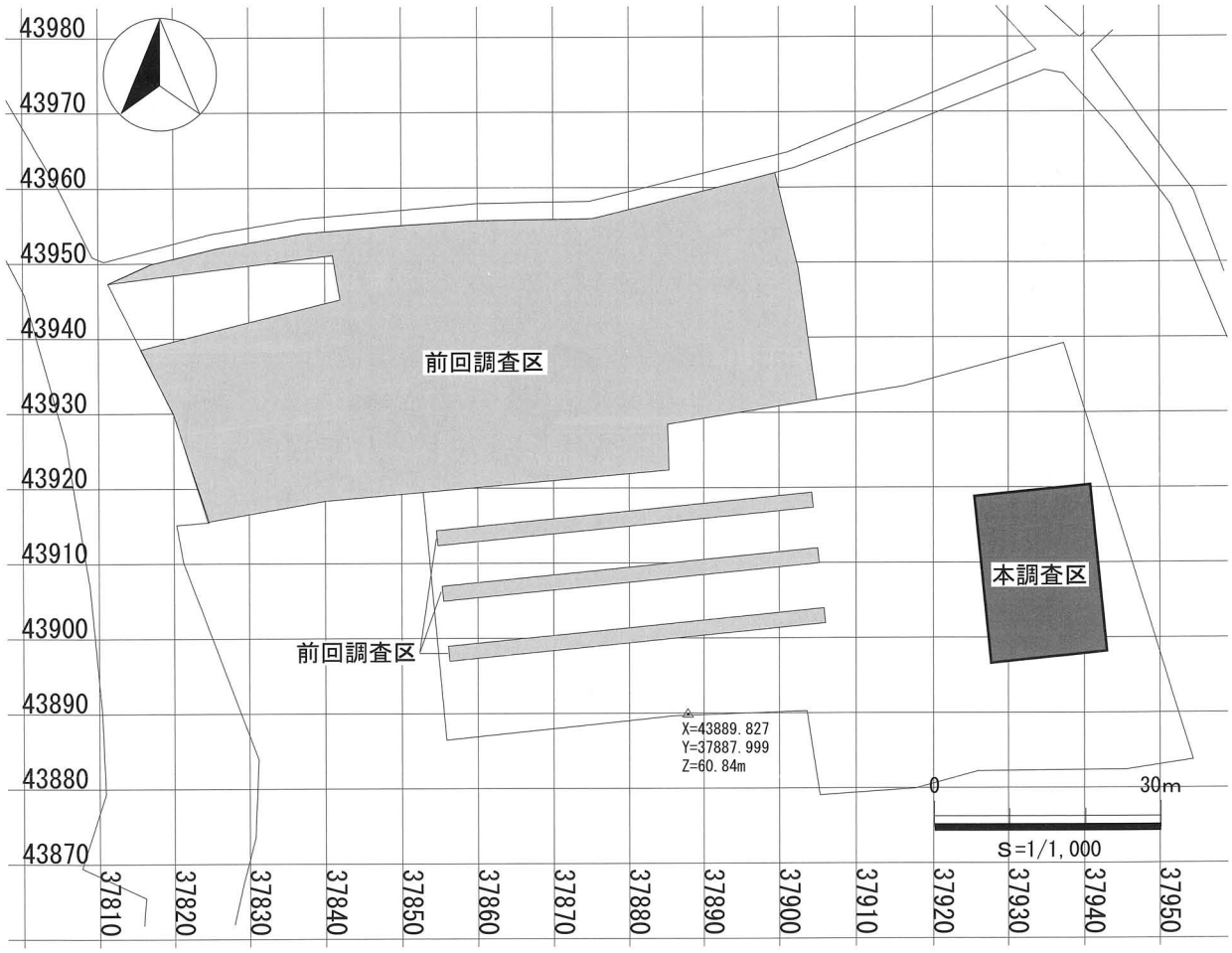
第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概要

今回の調査で、縄文時代の土坑 12 基、ピット１基、平安時代の住居１軒、屋外炉１基、時期不明の土坑 15 基、ピット１基の、総計 31 基の遺構を検出した。また、ハードローム層から石器が１点出土した。

縄文時代の土坑は、開口部の平面形がほぼ正円形で、断面形が半円形、または箱形を呈するものが主体である。土坑からは主に縄文時代後期前葉の土器が出土したが、小破片が多く、全体の器形が窺えない資料が大半である。石器は、剥片の出土が僅かに認められるのみであるが、当地において活発に用いられるチャートを石材としている。平安時代の住居、屋外炉からは土師器と須恵器が出土した。これらは、内面黒色処理が施される土師器坏や焼成不良の須恵器が主体であり、器面の調整手法などから９世紀代に位置付けられる。ただし、共に遺構の遺存状況は悪く、住居は床面、カマドおよび壁溝の一部を検出したのみである。各時代において、遺物の遺構間接合は認められなかった。

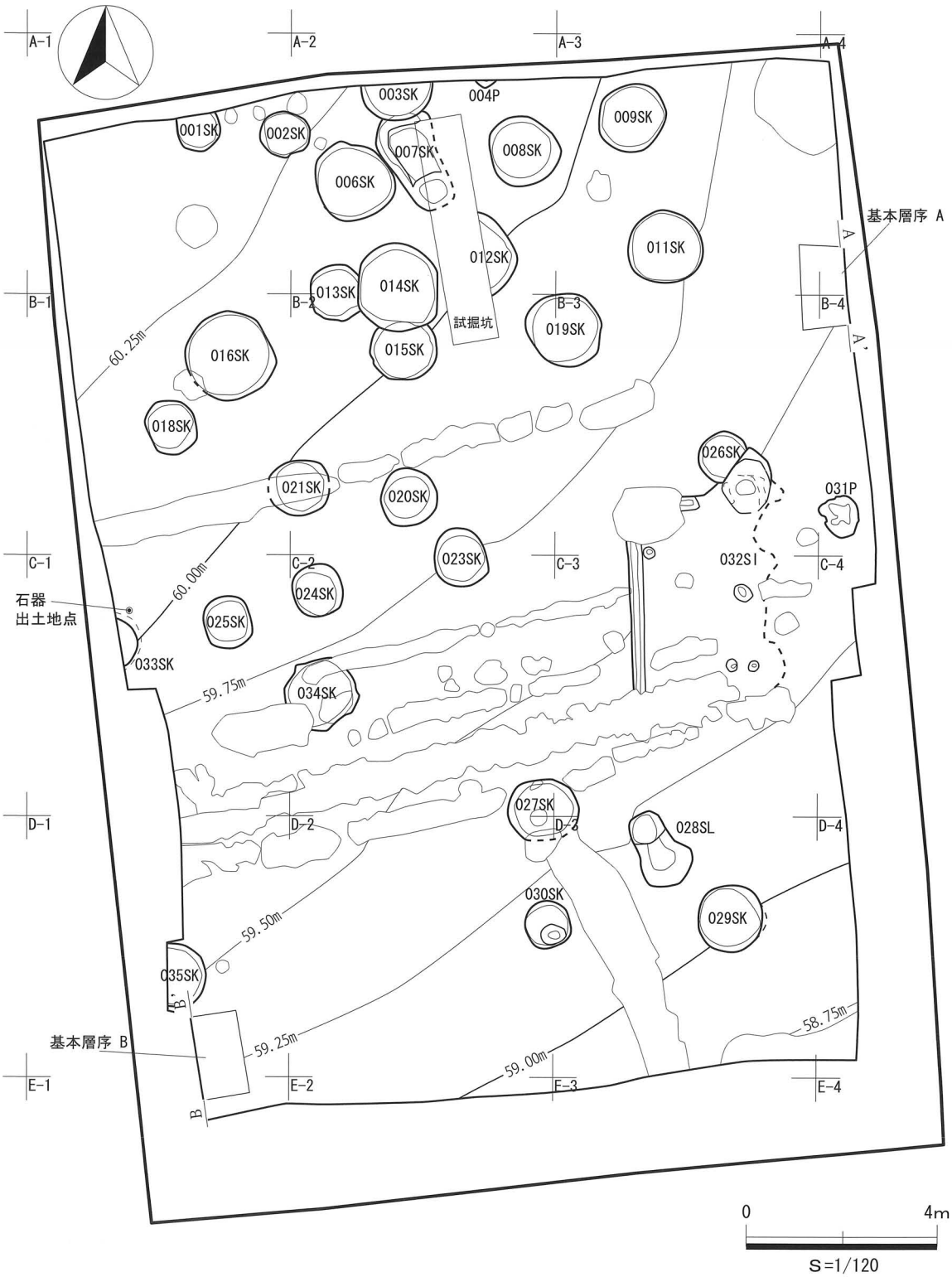
平成２、３年に、今回の調査区の西側において本調査（旧遺跡名：寺崎台地遺跡）が行なわれている（以下、前回調査）。主な調査成果として、縄文時代の住居１軒、円形周溝状遺構１基、奈良・平安時代の住居９軒、土坑９基の検出が報告されている。縄文時代の遺構からは、堀之内式に比定される土器が出土し、また、奈良・平安時代の住居跡からは、８世紀後半～ 10 世紀前半に位置づけられる土師器と須恵器が出土している。これらの成果は、本調査区においてもほぼ同様に確認された。今回の調査成果と合わせ、本遺跡は旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代の複合遺跡と位置づけられる。



第３図　峯崎遺跡調査区位置図

第２節　調査の方法

試掘調査の成果から、施設建設部分に相当する 329 ㎡を調査区として設定した。グリッドは調査区北西部を起点に 5m 四方のグリッドを設定し、東西を西側から算用数字で１～４、南北を北からアルファベットでＡ～Ｅと付した（第４図）。



第４図　峯崎遺跡調査区全体図

調査区北東部から重機による表土掘削を行なった後、人力による精査によって遺構プラン確認を実施した。また、試掘調査の成果から、遺構確認面は後述する4層直上に設定した。遺構番号は、確認された遺構から任意に001番から番号を付した。遺構調査を進める過程において、開口部が狭小で掘削が困難なものに限り、断割り調査を行なった。出土遺物は基本的に遺構一括として取り上げ、必要に応じてトータルステーションシステムを用いた三次元記録を行なった。

遺構平面図の作成はトータルステーションシステムを使用した三次元計測により行なった。また、遺構断面図の作成は手作業で行ない、縮尺はS=1/20を基本として必要に応じてS=1/10とした。写真撮影記録には35mmのモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルム、およびデジタルカメラを用いた。

第3節　基本層序

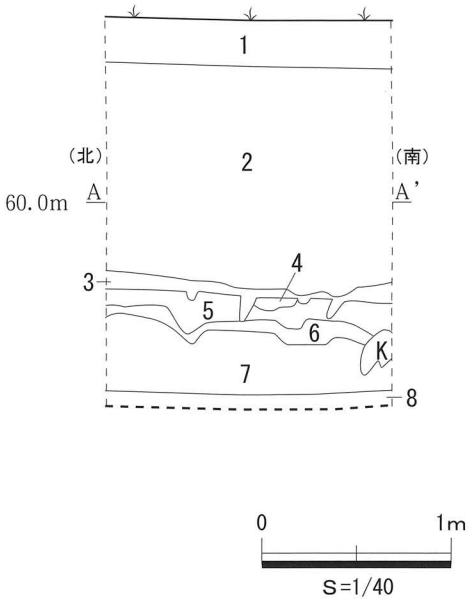
調査区東壁北部と西壁南部にトレンチを設定し（第4図）、基本土層の堆積状況を確認した（第5、6図）。

前回調査時において表土とされた耕作土が3層、その調査後の建築に伴う整地用の盛土が2層に相当すると考えられる。また、4～8層が関東ローム層にあたり、いわゆる鹿沼パミス層は7層に相当する。本調査区では、関東ローム層の直上に漸移層は認められず、ソフトローム層にあたる4層に至るまで後世の削平が及んでいる。

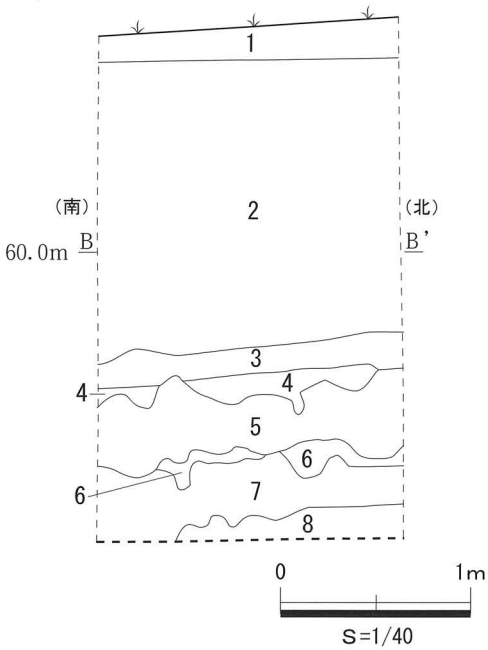
両記録地点において、5～8層は南へ緩やかに傾斜する堆積状況が認められる。ただし、B地点7層はA地点7層と異なり、包含される鹿沼パミスがブロック状を呈する。これは、調査区の南が台地縁辺の傾斜地となっていること、A地点に比べて6、8層との層理面が波状に起伏することから、傾斜地における再堆積によるものと考えられる。

基本層序

1　表土
2　盛土　砕石、ガラスなどを含む　現代の整地土
3　旧耕作土　黒色土　ローム粒、小礫などを含む　現代の耕作土
4　黄褐色ローム　しまり・粘性やや強い　橙色スコリア微量含む　ソフトローム
5　明黄褐色ローム　しまり強い　粘性やや強い　黒色スコリア微量、青灰色パミスごく微量含む　ハードローム
6　明黄褐色ローム　しまり強い　粘性やや強い　橙色スコリアごく微量、黒色スコリア微量、青灰色パミスごく微量、鹿沼パミス中量含む
7　黄色パミス　しまりやや強い　粘性あり　黒色スコリア、灰白色パミス微量含む　鹿沼パミス層
8　暗褐色ローム　しまり強い　粘性やや強い　小礫微量、黒色スコリア微量含む



第5図　基本層序　A地点



第6図　基本層序　B地点

第４章　調査の成果

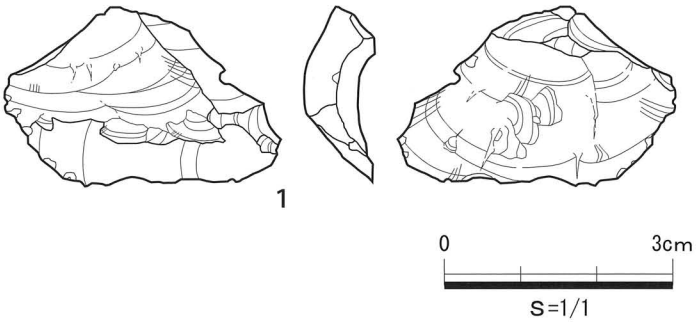
第１節　遺構と遺物

（1）旧石器時代

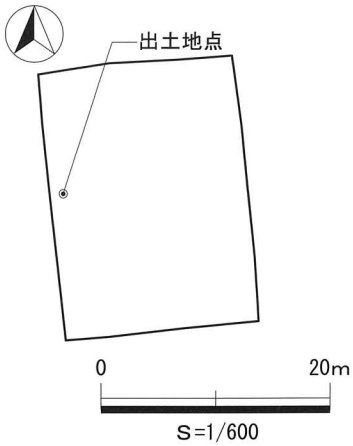
033SK の断割り調査時に、ローム層から石器が１点出土した（第８図）。今回の調査においては１点のみの出土であるが、旧石器時代の遺物として扱う。

二次加工を有する剥片（第７図）

５層（ハードローム層）上位から出土した。石材は灰色の不純物を斑点状に含む漆黒色の黒曜石である。器長 24mm、器幅 36mm、最大厚 7mm を測る。寸詰まりの横長剥片を素材とし、背腹両面からの折断によって打瘤部を除去する二次加工が施される。末端部左縁の背腹両面に微小剥離痕が認められる。背面下端部の剥離面は風化が顕著である。



第７図　旧石器時代　出土遺物



第８図　遺物出土地点図

（2）縄文時代

006SK（第９・10 図、表２）

位置　調査区北部、A-2 グリッドに位置する。

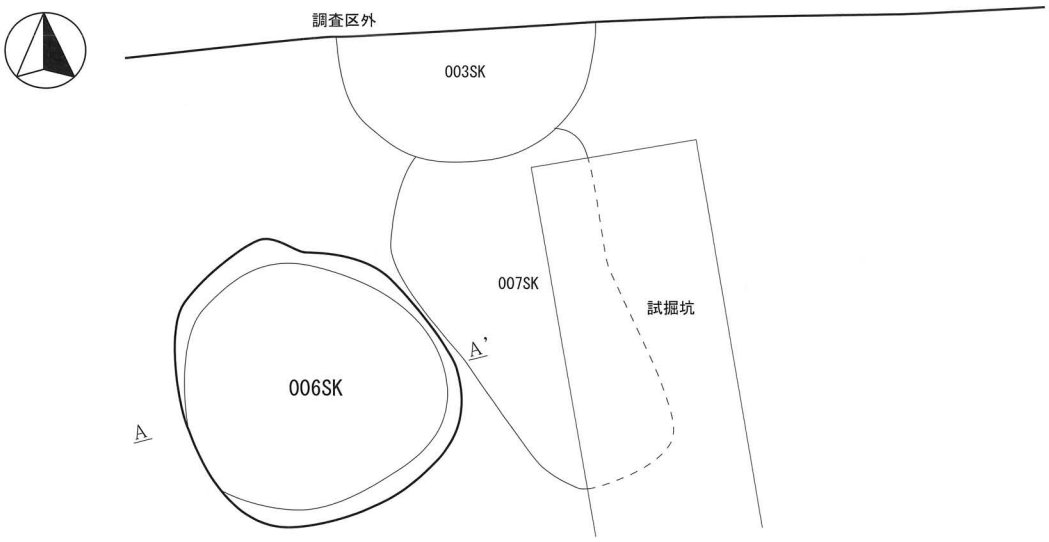
規模と形状　規模は長径 1.53m、短径 1.39m、深さ 0.52m を測る。平面形は円形を呈する。壁は遺構底面から 0.15m 上までわずかにオーバーハングし、そこから開口部にむかって緩やかに外反しながら立ち上がる。壁面は上下方向の凹凸が著しい。底の深度は鹿沼パミス層（７層）とその直下ハードローム層（８層）との層理面まで到達し、底面はほぼ平坦に整えられている。

覆土　５層に区分した。しまりがやや強く、ローム粒を含む黒褐色の覆土を主体とする。

遺物　縄文土器26点が出土した。土器は小破片が多いが、縄文時代後期と考えられる櫛描文が施文されるものや、沈線によって区画される磨消縄文を有するものが認められる。実測遺物は３点である。

１は口唇部に刺突による列点文が施され、外器面には沈線文が描かれる。２は口縁直下に隆帯が巡り、胴部に沈線文が施される。３は横位の隆帯上に列点文が施される。

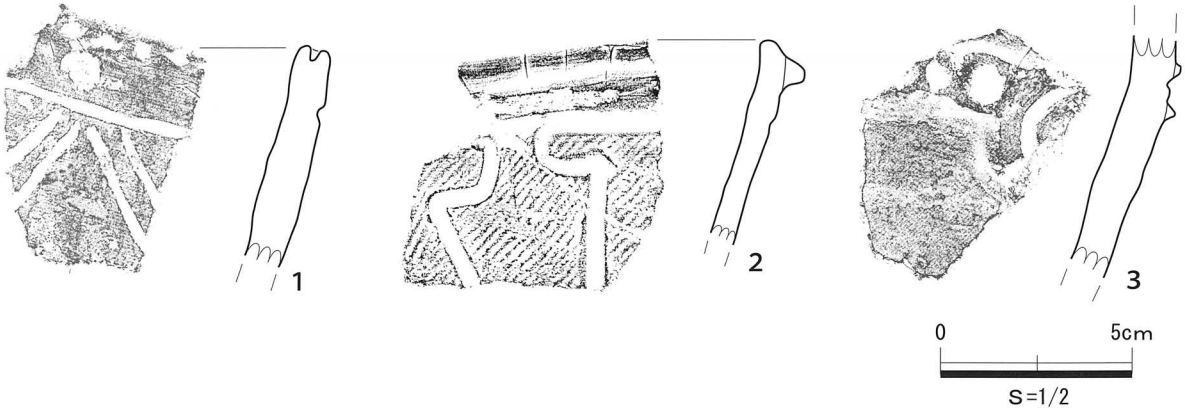
時期　出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



006SK
1　褐色土　しまりやや強い　粘性強い　ロームBL・粒多量、炭化物微量、焼土微量、鹿沼パミス中量含む
2　黒褐色土　しまり・粘性やや強い　ローム粒少量、炭化物微量、焼土微量含む
3　黒褐色土　しまり・粘性やや強い　ローム粒中量含む
4　褐色土　しまりあり　粘性強い　ロームBL・粒多量含む
5　黒褐色土　しまり・粘性やや強い　ローム粒微量、焼土微量、鹿沼パミス少量含む

0　1m
S=1/40

第 9 図　006SK 平面図・断面図



第 10 図　006SK 出土遺物

表 2　006SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期	備考（接合関係）
1	006SK	一括	深鉢		(58)			口縁部	波状口縁　口唇部に刺突 口縁に沿う沈線とその直下に斜行する平行沈線	後期	器面黒色
2	006SK	一括	深鉢		(54)			口縁部	口縁に沿う隆帯　幅広な沈線文　地文無節縄文	称名寺～堀之内式	
3	006SK	一括	深鉢		(61)			胴部	隆帯上に刺突	後期	器面黒色

007SK（第 11・12 図、表 3）

位置　調査区北部、A-2 グリッドに位置する。

重複関係　遺構北辺を 003SK に切られる。

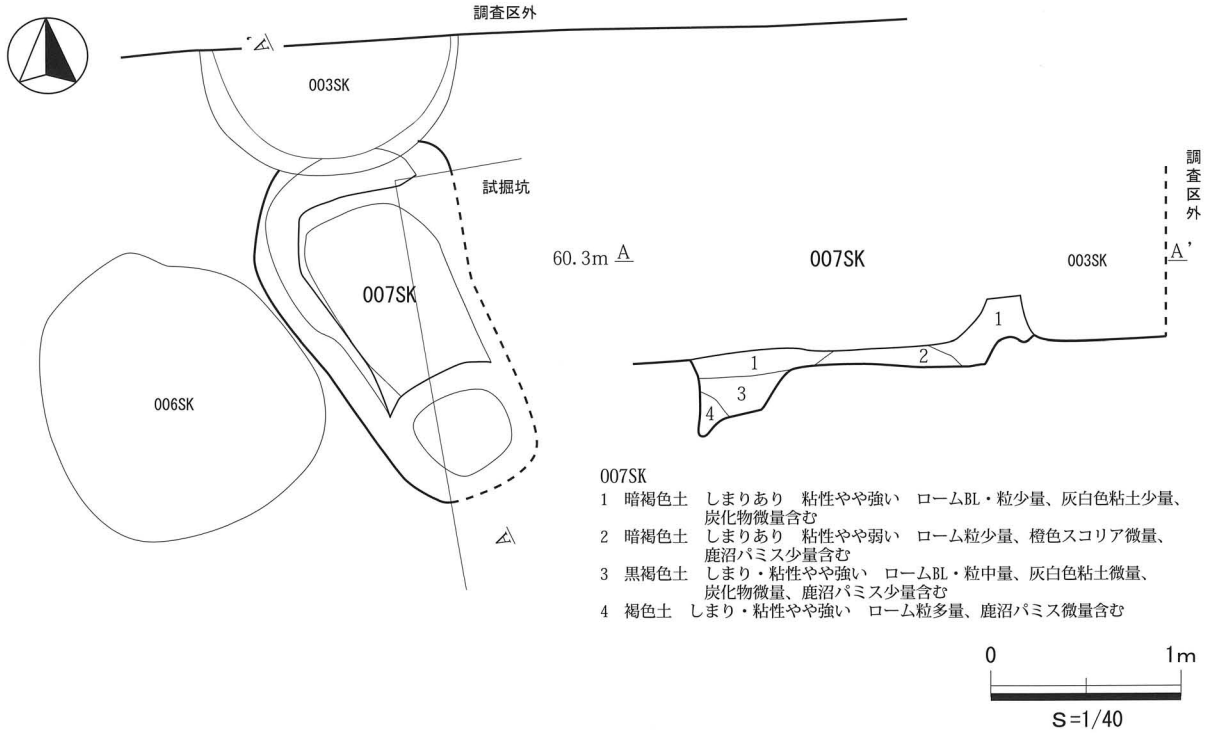
規模と形状　規模は長径 1.72m、短径 1.15m、深さ 0.40m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺構北、西壁は底面から 0.14m 上で大きく外反し、テラス状部分を形成している。底面は遺構中央部においてほぼ平坦であるが、遺構南部にピット状の落ち込みが認められる。

覆土　4 層に区分した。覆土は、ローム土と灰白色粘土がブロック状に含まれる暗褐色土が主体である。粘土は 20 ～ 30cm 大のブロックから径 1mm 程度の粘土粒まで認められ、覆土内に疎らに含まれる。

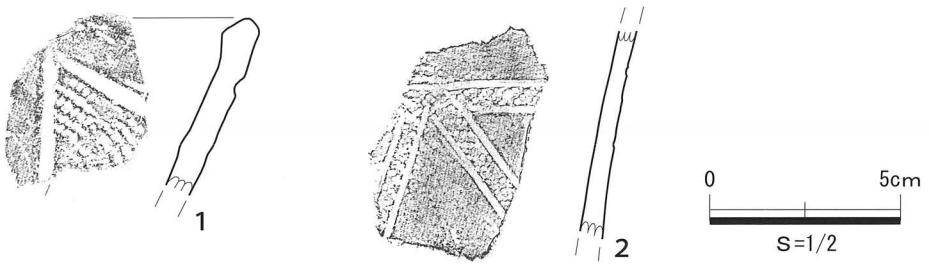
遺物　縄文土器 9 点が出土した。実測遺物は時期の特定が可能な 2 点である。

1 は深鉢の口縁部で、直線的な沈線によって区画される。2 は、沈線による区画内に不定方向の縄文を充填している。1、2 は共に堀之内 2 式に比定される。

時期　出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



第 11 図　007SK 平面図・断面図



第 12 図　007SK 出土遺物

表 3　007SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	最大径（mm）	部位	文様・器面調整	時期	備考（接合関係）
1	007SK	一括	深鉢		(47)			口縁部	直線的な沈線によって区画される磨消縄文　地文単節縄文	堀之内2式	
2	007SK	一括	深鉢		(54)			胴部	直線的な沈線による横位1条と逆V字状の区画内に単節縄文を充填	堀之内2式	器面黒色

016SK（第 13・14 図、表 4・5）

位置　B-1 グリッドに位置する。

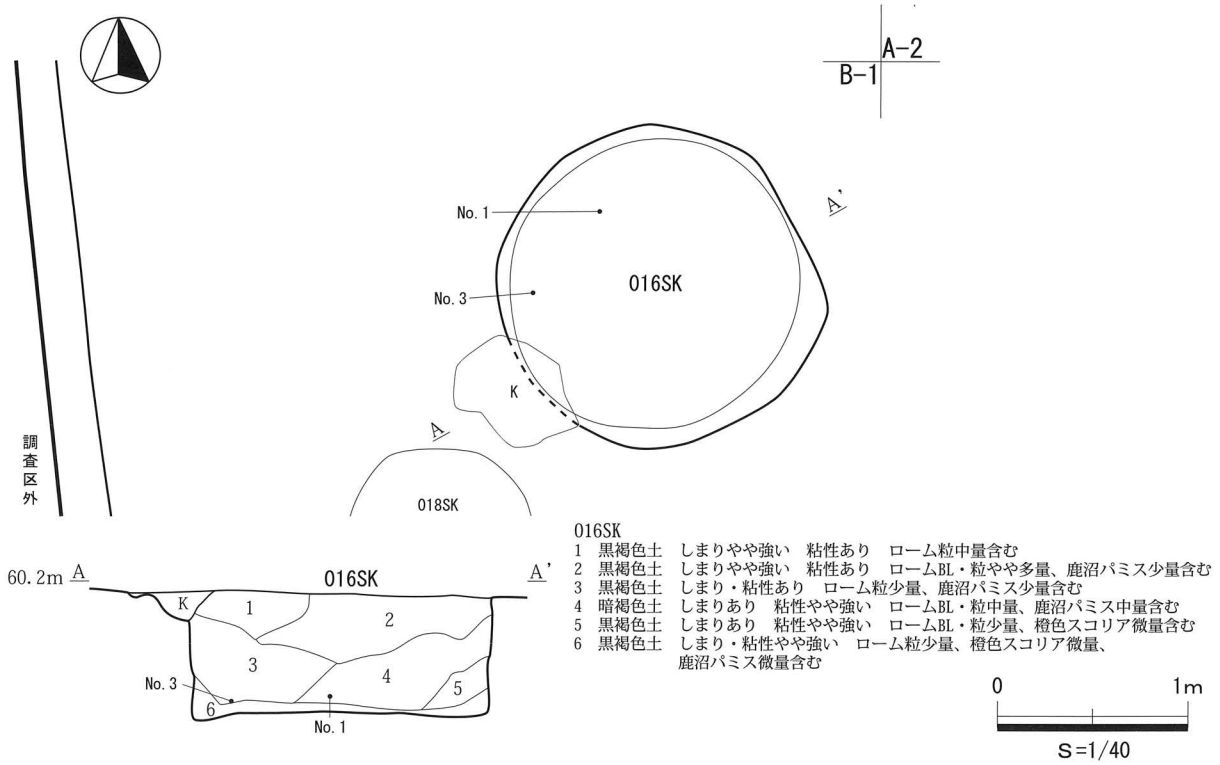
規模と形状　規模は　長径 1.76 m、短径 1.71 m、深さ 0.68 mを測る。平面形は円形を呈する。壁は底面から開口部にむかって直立するように立ち上がり、壁面は起伏に富む。東壁の壁面に露出する鹿沼パミス層は上部が変色硬化している。底の深度は鹿沼パミス層（7 層）の最下部で、南西部は直下のハードローム層（8 層）上面にまで達している。底面は平坦である。

覆土　6 層に区分した。ロームブロックと鹿沼パミス粒を含む暗褐色土と黒褐色土で構成される。4・5 層は東方向から流入した堆積状況が窺える。

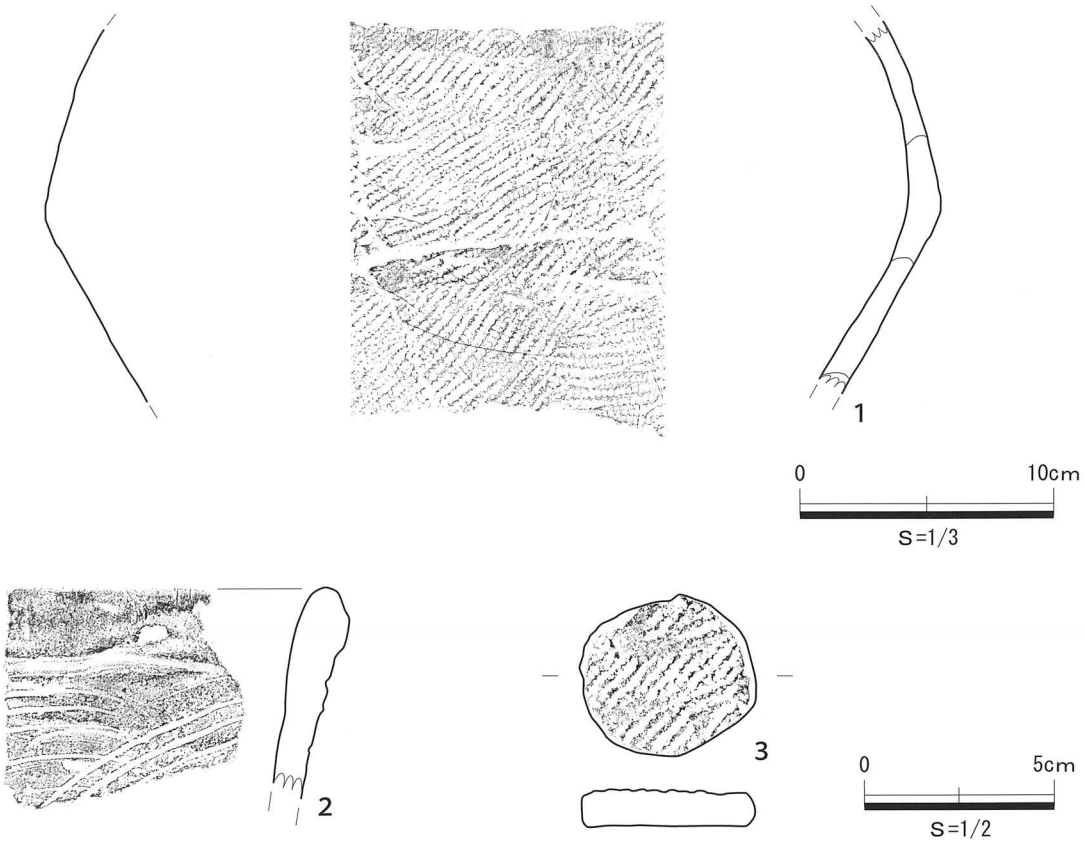
遺物　出土遺物は縄文土器 31 点、土製品 1 点である。土器は図化困難な小破片が多いため、実測遺物は 3 点である。他に、胴部に磨消縄文が施される土器が認められる。

1 は、遺構底面付近から出土した深鉢の肩部で、単節縄文を地文とする。2 は深鉢の口縁部で、口唇部が肥厚し、弧状の櫛描文が認められる。3 は土製円盤である。ほぼ円形に整えられ、周縁部の断面には摩滅が認められる。

時期　出土遺物には、胴部に磨消縄文が施される土器が多く認められ、また、006SK 出土土器同様に、無文地に幅広な沈線を施すものが認められる。これらの出土遺物から、縄文時代中期後半～後期前葉と考えられる。



第 13 図　016SK 平面図・断面図



第 14 図　016SK 出土遺物

表 4　016SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期	備考（接合関係）
1	016SK	No.1	深鉢		(141)		〈344〉	肩部	単節縄文		
2	016SK	No.3	深鉢		(56)			口縁部	口唇部肥厚　弧状の櫛描文	後期	

表 5　016SK 出土　土製品観察表

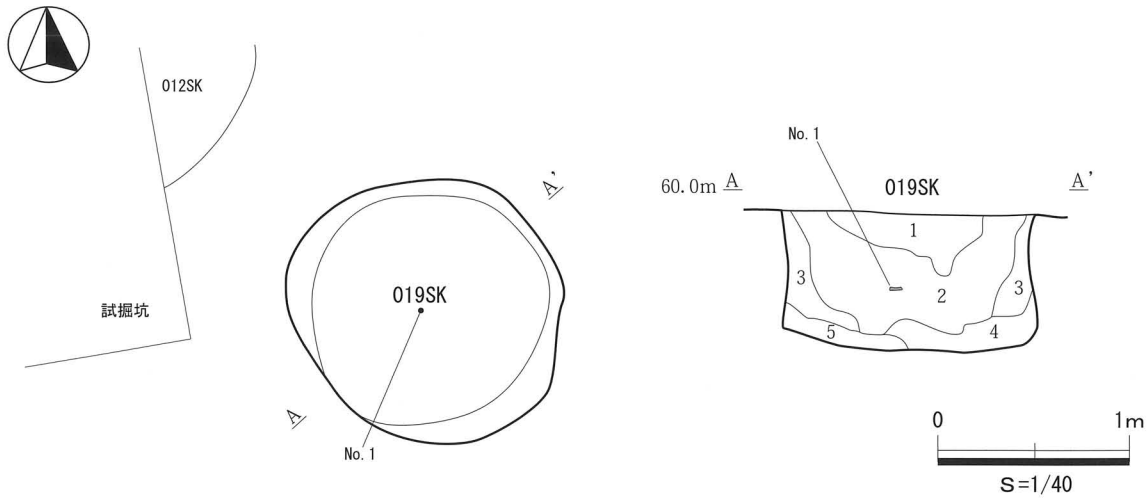
番号	遺構NO.	出土地点	器種	最大径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	文様・調整など	備考
3	016SK	一括	土製円盤	45	10	21.2	単節縄文　断面部に摩滅が認められる	

019SK（第 15・16 図、表 6）

位置　B-3 グリッドに位置する。

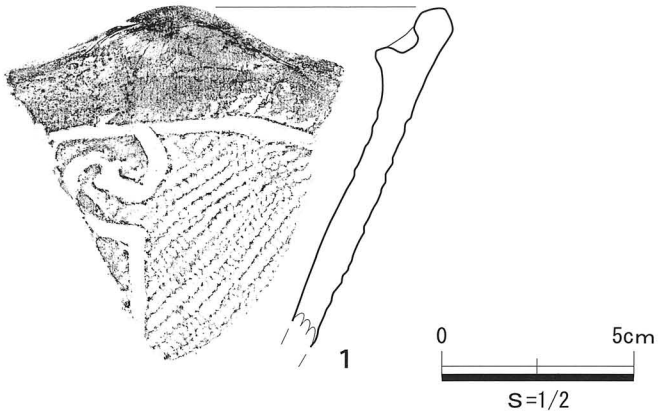
規模と形状　規模は長径 1.49 m、短径 1.31 m、深さ 0.73 mを測る。平面形は円形を呈する。壁は遺構底面付近がわずかにオーバーハングする。壁面全面に凹凸が認められる。底の深度はハードローム層（8 層）の上部に達する。底面はほぼ平坦に整えられている。

覆土　5 層に区分した。ロームブロックを含む黒褐色土を主体として、レンズ状に堆積する。1 層を除いて、土質は近似する。



019SK
1　褐色土　しまりやや強い　粘性強い　ロームBL・粒多量、炭化物微量、焼土微量、鹿沼パミス少量含む
2　黒褐色土　しまり・粘性やや強い　ローム粒少量、炭化物微量、焼土微量含む
3　暗褐色土　しまり・粘性やや強い　ロームBL・粒中量、炭化物微量、鹿沼パミス微量含む
4　暗褐色土　しまり強い　粘性やや強い　ロームBL・粒中量、灰白色粘土微量、橙色スコリア微量、鹿沼パミス少量含む
5　暗褐色土　しまり強い　粘性やや強い　ロームBL・粒中量、灰白色粘土微量、橙色スコリア微量含む

第 15 図　019SK 平面図・断面図



第 16 図　019SK 出土遺物

表 6　019SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	最大径（mm）	部位	文様・器面調整	時期	備考（接合関係）
1	019SK	No. 1	深鉢		(90)			口縁部	波状口縁　波頂部に刺突　口縁部は沈線により区画し磨消縄文 沈線による渦巻文あるいは蕨手文　地文単節縄文	堀之内1式	器面黒色

遺物　出土遺物は縄文土器 8 点、礫 3 点である。出土した土器は小破片のみであるため、実測遺物は口縁部の 1 点である。

1 は、波状口縁を呈する深鉢の口縁部である。波頂部に刺突文が施される。横位に巡る沈線により区画され、地文縄文部分に沈線によって文様が描出される。堀之内 1 式に比定される。

時期　出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

029SK（第 17・18 図、表 7）

位置　調査区南東部、D-3 グリッドに位置する。

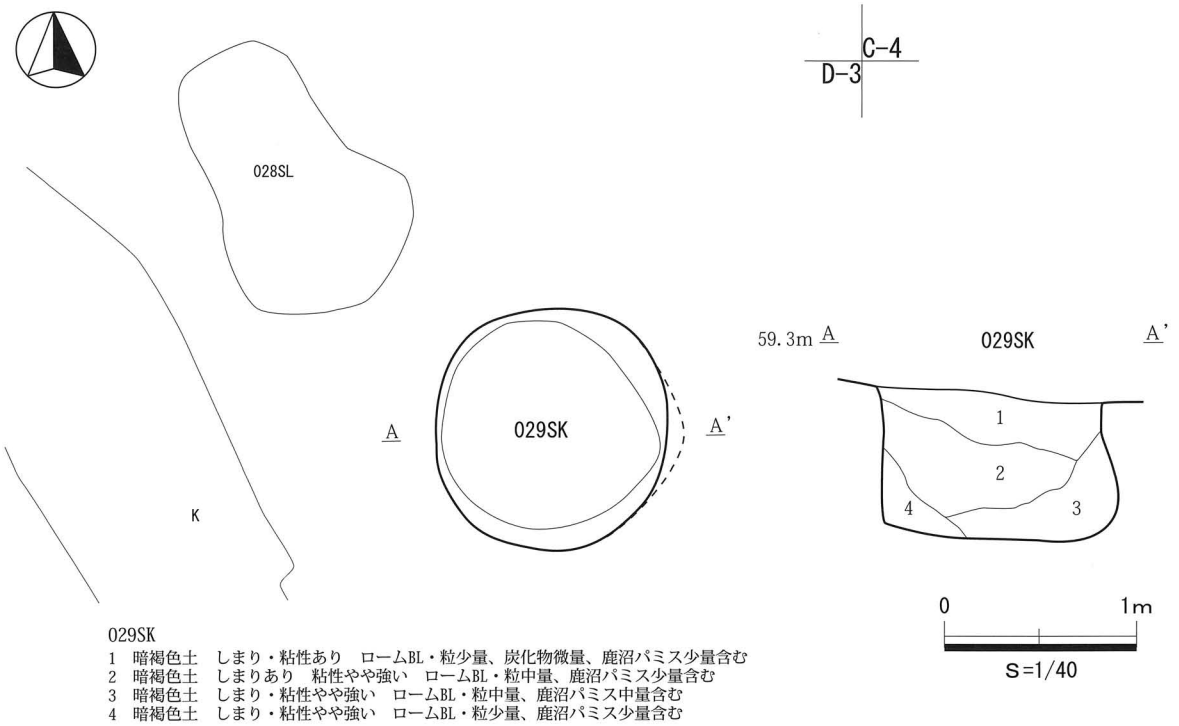
規模と形状　規模は長径 1.28 m、短径 1.20 m、深さ 0.72 mを測る。平面形は円形を呈する。壁は遺構東部において底面から 0.52m 上までオーバーハングする。壁面は起伏に富む。底はハードローム層（8 層）の上部に設けられ、底面は平坦である。

覆土　4 層に区分した。1 ～ 4 層はロームブロックと鹿沼パミスを含む暗褐色土であり、土質は近似している。

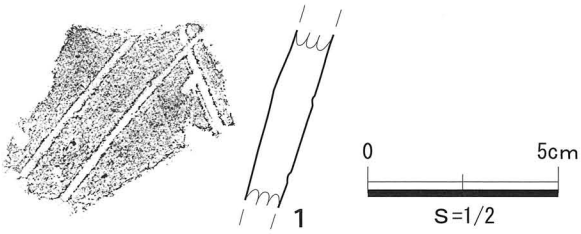
遺物　出土遺物は縄文土器 17 点である。出土した土器は無文の小破片が多い。実測遺物は 1 点である。

1 は粗製の深鉢の胴部で、沈線による粗い格子目文が施される。

時期　出土遺物には、櫛描文が施文される粗製の深鉢も認められた。これら出土遺物から、縄文時代後期と考えられる。



第 17 図　029SK 平面図・断面図



第 18 図　029SK 出土遺物

表 7　029SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	最大径（mm）	部位	文様・器面調整	時期	備考（接合関係）
1	029SK	一括	深鉢		(47)			胴部	沈線による格子目文	後期	器面黒色

(3) 平安時代

028SL（第 19 図）

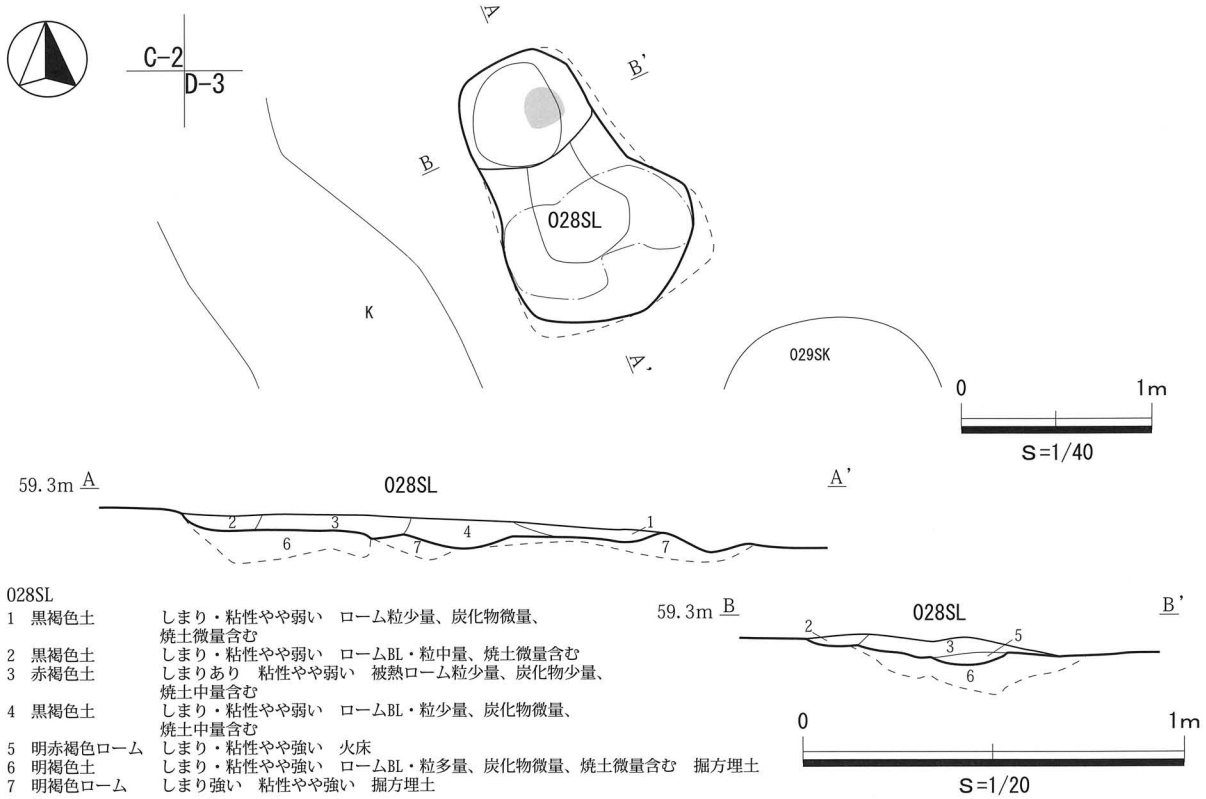
位置　調査区南東部、D-3 グリッドに位置する。

規模と形状　規模は長軸 1.52m、短軸 1.04m、深さ 0.29m を測る。平面形は不整楕円形を呈する。主軸方向は N-34°-W である。火床は遺構北部に位置し、径 0.20m 範囲のローム土が被熱により赤変硬化している。火床以外に遺構内に被熱痕跡は認められない。足場と想定される硬化面が遺構南部に認められる。硬化範囲は東西を長軸とし、ほぼ平坦である。ピットなどの付帯施設は認められなかった。

覆土　5 層に区分した。ローム土、焼土および炭化物を含む黒褐色土を主体とする。5 層は火床である。6、7 層は掘方の埋土にあたり、ローム土を主体とする。

遺物　出土遺物は縄文土器 2 点、土師器 12 点、須恵器 1 点、被熱礫 1 点である。遺物は図化困難な小破片のみである。

時期　出土遺物は小破片ではあるが、内面黒色処理された土師器坏や、焼成不良の須恵器などが認められるため、9 世紀代と考えられる。



第 19 図　028SL 平面図・断面図

032SI（第 20・21 図、表 8）

位置　調査区中央東部、C-3 グリッドに位置する。

重複関係　026SK を切る。削平により遺構東半部は失われ、カマド、西側壁溝、床が遺存する。

規模　残存部で長軸 4.74m、短軸 3.20m を測る。主軸方向は N-3°-W である。

床　ほぼ平坦である。硬化面は複数箇所に認められ、顕著な硬化は遺構南部中央である。

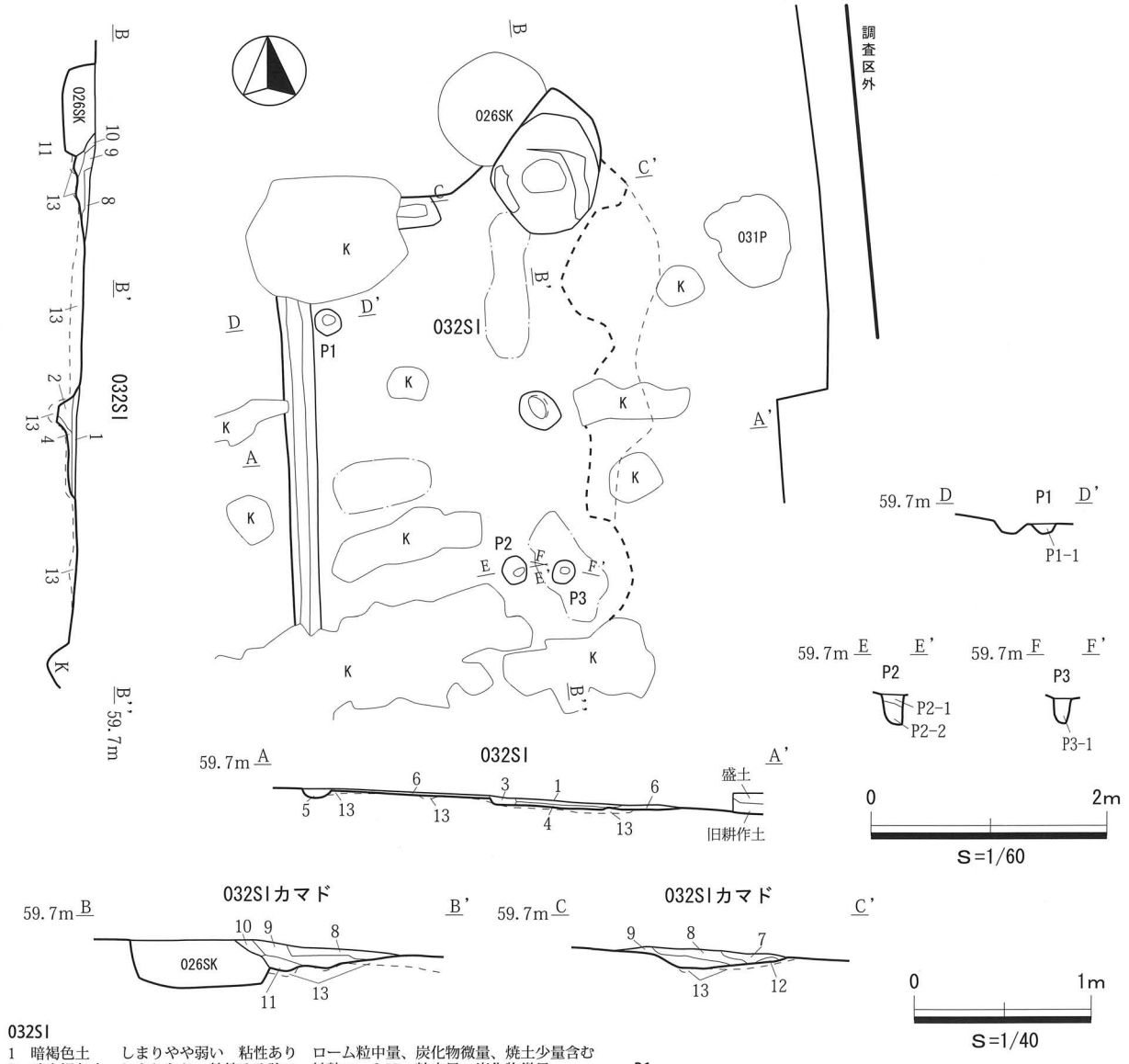
ピット　P1 は床面、P2 と P3 は掘方より検出した。P2、P3 は位置関係から、住居入口付近の副柱穴と考えられる。

カマド　住居北側に付設され、規模は焚口から煙道部まで 1.21m、袖部幅 0.72m である。火床は認められなかったが、煙道部下面に相当する部位（10 層）に焼土が顕著に認められる。

覆土　13 層に区分した。住居中央において、掘り込み部分と焼土や被熱ローム粒を含む土層が認められ、炉が存在した可能性を示している。13 層は掘方の埋土である。

遺物　出土遺物は縄文土器 20 点、土師器 184 点、須恵器 5 点である。実測遺物は 7 点である。

1 は小型甕の口縁部である。胴部の外面に縦位のヘラナデ調整が認められる。2 は底部に「×」のヘラによる線刻が認められる。3 は坏の口縁部で、器面は横位のナデにより整えられている。4 は高台坏の底部で、内面は炭素吸着による黒色処理が施される。5 は須恵器坏の口縁部である。器面は還元焔焼成が不十分のため、橙色を



032SI

1　暗褐色土　しまりやや弱い　粘性あり　ローム粒中量、炭化物微量、焼土少量含む
2　暗赤褐色土　しまりあり　粘性やや強い　被熱ロームBL・粒少量、炭化物微量、焼土少量含む
3　暗褐色土　しまり・粘性あり　ローム粒少量含む
4　暗褐色土　しまり・粘性やや強い　被熱ロームBL・粒やや多量、焼土少量含む
5　暗褐色土　しまりあり　粘性やや強い　ロームBL・粒中量含む
6　褐色土　しまり・粘性あり　ロームBL・粒やや多量含む　貼床に相当
7　黒褐色土　しまりやや弱い　粘性あり　ローム粒微量、炭化物微量、焼土少量含む
8　黒褐色土　しまりあり　粘性やや弱い　ローム粒微量、褐灰色粘土微量、炭化物微量、焼土少量含む
9　黒褐色土　しまり・粘性あり　ロームBL・粒微量、褐灰色粘土中量、炭化物少量、焼土中量含む
10　赤褐色焼土　しまりやや強い　粘性あり　煙道下面部か
11　灰褐色土　しまり・粘性やや強い　ロームBL・粒中量、褐灰色粘土微量、焼土少量含む
12　黒褐色土　しまり・粘性やや強い　ローム粒微量、褐灰色粘土微量、焼土微量含む　ソデに相当
13　褐色土　しまりやや強い・粘性強い　ロームBL・粒多量含む

P1

1　黒褐色土　しまり・粘性やや弱い　ロームBL・粒少量、焼土微量含む

P2

1　褐色土　しまりあり・粘性やや強い　ロームBL・粒多量含む
2　暗褐色土　しまりやや弱い・粘性やや弱い　ロームBL・粒少量、鹿沼パミス微量含む

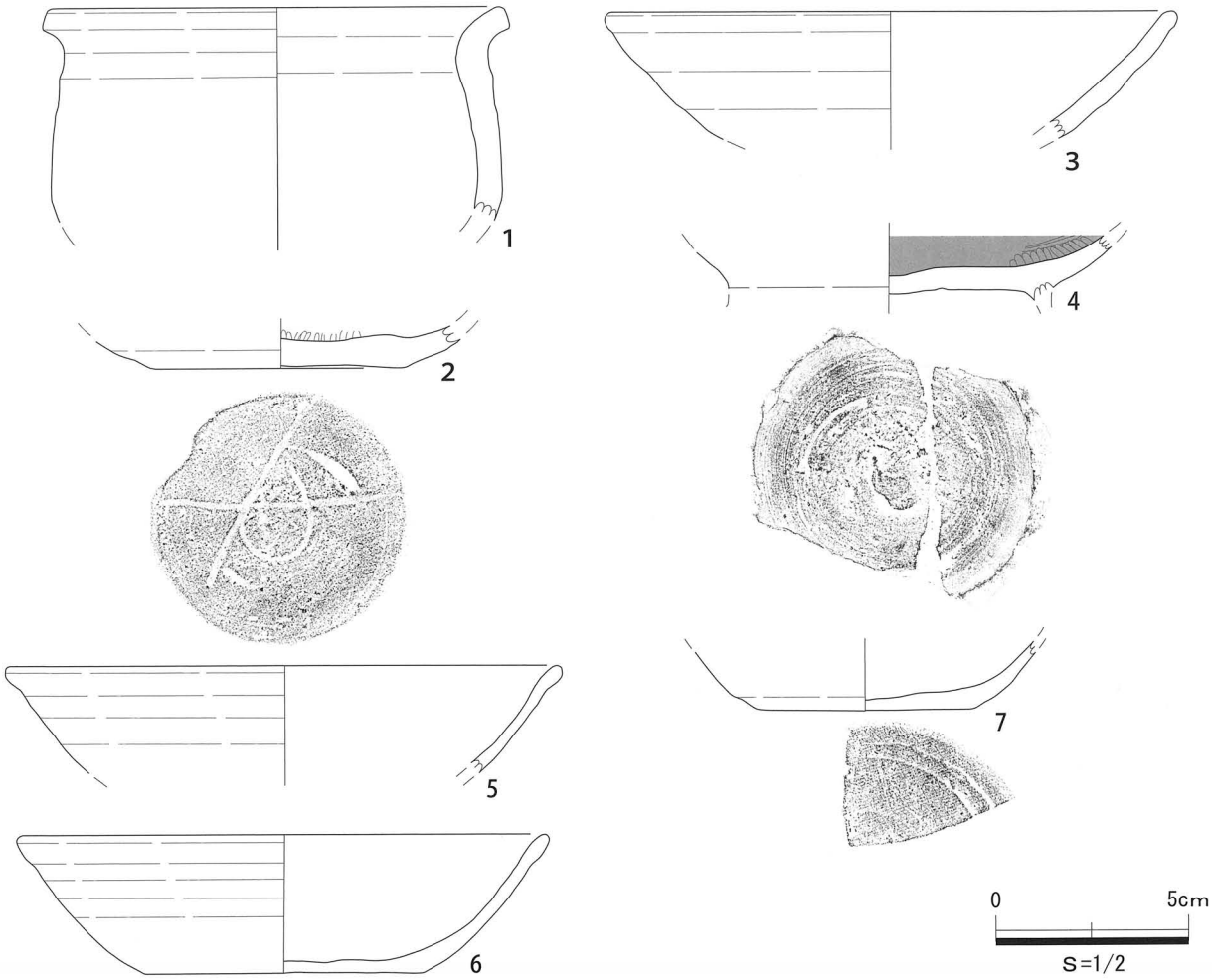
P3

1　褐色土　しまりあり・粘性やや強い　ロームBL・粒多量含む

第 20 図　032SI 平面図・断面図

呈する。6は須恵器坏で底部は回転ヘラ切りののち、未調整である。7は須恵器坏の底部で、体部の下端はヘラケズリ調整が施される。

時期　出土遺物の様相から9世紀第3～4四半期と考えられる。



第21図　032SI 出土遺物

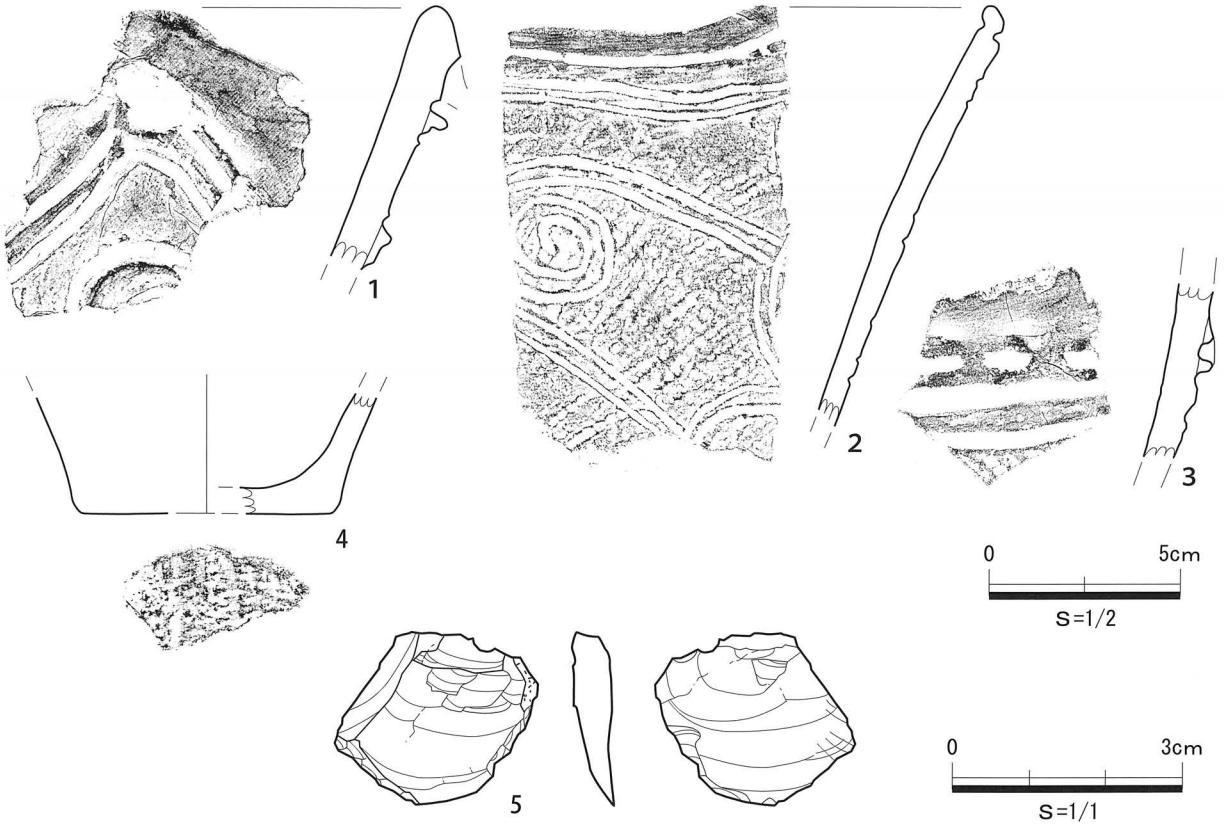
表8　032SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	032SI	一括	小型甕	土師器	<116>	(52)			口縁部	口辺部横ナデ 外面胴部ヘラケズリのちヘラナデ（縦） 内面ヘラナデ（横）	白雲母 長石	赤褐色	普通		
2	032SI	一括	小型甕	土師器			66		底部	外面胴部下端回転ヘラケズリ 内面ミガキ　底部回転ヘラケズリ ヘラ記号「×」	雲母 石英	橙色	普通		
3	032SI	カマド	坏	土師器	<146>	(34)			口縁部	外面・内面横ナデ　外面スス付着	雲母 長石 石英	橙色	普通		
4	032SI	床直	高台付坏	土師器			<40>		底部	外面横ナデ 内面黒色処理・ミガキ 底部回転ヘラ切りのち高台縁ヘラケズリ	白雲母 長石 石英	橙色	普通		
5	032SI	カマド	坏	須恵器	<144>	(29)			口縁部	外面・内面横ナデ	白雲母	橙色	不良	9世紀第3～4四半期	
6	032SI	カマド	坏	須恵器	<138>	37	<74>	<140>	口縁部～底部	外面体部下端ヘラケズリ（手持ち） 外面・内面横ナデ 底部回転ヘラ切り	白雲母	橙色	不良	9世紀第3～4四半期	
7	032SI	カマド	坏	須恵器			<58>		底部	外面体部下端ヘラケズリ（手持ち） 外面・内面横ナデ 底部回転ヘラ切り	白雲母	灰白色	普通	9世紀第3～4四半期	

(4) 非抽出遺構・遺構外出土遺物

非抽出遺構および遺構外から出土した縄文時代の遺物5点を掲載する（第22図、表9・10）。

1は、013SKから出土した深鉢の口縁部である。波状口縁を呈し、斜行する隆帯と沈線によって施文される。2は、深鉢の口縁部で、口唇部直下の内外器面に横位の沈線が巡り、胴部には渦巻文が施される。堀之内1式に比定される。3は014SKから出土した深鉢である。隆帯上に刺突文が認められ、その隆帯に沿って平行沈線が巡る。4は深鉢の底部で、網代痕が認められる。5は、018SKから出土したチャート製の微小剥離を有する剥片である。剥片の左右両縁辺に微小剥離痕が認められる。



第22図　非抽出遺構・遺構外出土遺物

表9　非抽出遺構・遺構外出土　土器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期	備考（接合関係）
1	013SK	一括	深鉢		(72)			口縁部	波状口縁　隆帯上と隆帯縁に沿う沈線		
2		確認面一括	深鉢		(116)			口縁部	波状口縁　口唇部直下の内外器面に沈線　平行沈線による渦巻文　地文単節縄文	堀之内1式	
3	014SK	一括	深鉢		(46)			胴部	横位隆帯上に刺突文　隆帯に沿う平行沈線　磨消縄文		
4		表採	深鉢			〈64〉		底部	網代痕		

表10　非抽出遺構・遺構外出土　石器観察表

番号	遺構NO.	出土地点	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	特徴	備考
5	018SK	一括	微小剥離を有する剥片	28	27	6	3.7	チャート	左・右縁辺に微小剥離	

表 11　峯崎遺跡　検出遺構一覧表

遺構No.	掲載	グリッド	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主な遺物	時期	切り合い	備考
001SK		A-1	円形	半円形	0.82	(0.71)	0.33	縄文土器 土師器		なし	
002SK		A-1	円形	半円形	0.96	0.89	0.07	縄文土器 土師器		なし	
003SK		A-2	円形	箱形	1.34	(0.69)	0.34	縄文土器	縄文時代	007SK＜	
004P		A-2	不明	半円形	0.40	(0.15)	0.15	縄文土器 土師器		なし	
005		－	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱
006SK	◎	A-2	円形	箱形	1.53	1.39	0.52	縄文土器	縄文後期前葉	なし	
007SK	◎	A-2	楕円形	不整形	1.72	1.15	0.40	縄文土器	縄文後期前葉	＜003SK	土師器が混入
008SK		A-2	円形	半円形	1.34	1.34	0.22	縄文土器	縄文時代	なし	
009SK		A-3	円形	不整形	1.30	1.30	0.17	縄文土器 土師器		なし	
010		－	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱
011SK		A-3	円形	半円形	1.43	1.39	0.15	縄文土器 土師器		なし	
012SK		A-2	不明	半円形	1.62	0.60	0.18	縄文土器	縄文時代	なし	
013SK		A-2	円形	箱形	1.08	0.89	0.25	縄文土器 土師器		＜014SK	
014SK		A-2	円形	箱形	1.69	1.38	0.27	縄文土器 土師器		013SK・015SK＜	
015SK		B-2	円形	箱形	1.26	0.91	0.25	縄文土器		＜014SK	
016SK	◎	B-1	円形	箱形	1.76	1.71	0.68	縄文土器	縄文中期～後期	なし	
017		－	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱
018SK		B-1	円形	箱形	1.07	0.91	0.35	縄文土器	縄文時代	なし	
019SK	◎	B-3	円形	箱形	1.49	1.31	0.73	縄文土器	縄文後期前葉	なし	
020SK		B-2	円形	半円形	1.10	1.06	0.25	縄文土器 土師器		なし	
021SK		B-2	円形	箱形	1.15	1.04	0.30	縄文土器	縄文時代	なし	
022		－	－	－	－	－	－	－	－	－	欠番
023SK		C-2	円形	半円形	1.14	0.98	0.11	縄文土器 土師器		なし	
024SK		C-2	円形	半円形	1.00	0.98	0.06	縄文土器 土師器		なし	
025SK		C-1	円形	半円形	1.00	0.89	0.23	縄文土器	縄文時代	なし	
026SK		B-3	円形	半円形	0.99	0.93	0.28	縄文土器 土師器		＜032SI	
027SK		C-2	円形	半円形	1.35	1.16	0.30	縄文土器 土師器		なし	
028SL	◎	D-3	不整楕円形	不整形	1.52	1.04	0.29	縄文土器 土師器	平安時代(9世紀)	なし	
029SK	◎	D-3	円形	袋形	1.28	1.20	0.72	縄文土器	縄文後期	なし	土師器が混入
030SK		D-2	円形	不整形	0.89	0.86	0.45	縄文土器	縄文時代	なし	
031P		B-4	不整形	半円形	0.78	0.62	0.13	縄文土器	縄文時代	なし	
032SI	◎	C-3	方形	不整形	4.74	3.20	0.16	縄文土器 土師器	平安時代(9世紀第3～4四半期)	026SK＜	
033SK		C-1	円形	袋形	0.93	(0.34)	0.90	なし		なし	
034SK		C-2	円形	半円形	1.36	1.32	0.16	なし		なし	
035SK		D-1	円形	箱形	1.20	(0.73)	0.30	なし		なし	
036		－	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱
037		－	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱
038P		D-2	円形	U字状	0.47	0.38	0.45	なし		030SK内ピット	

※一部、調査区外にかかる遺構の計測値は( )で示した。

第２節　まとめ

本節では、今回の調査成果について概観しながら、平成２、３年の調査（以下、前回調査）成果を一部援用し、まとめとする。

1．旧石器時代について

近年、笠間市内においては、小組遺跡での出土例をはじめとして徐々に旧石器時代の資料が増加しており、様相が把握されつつある。その成果の中で、市域周辺の石器石材環境に目を向けると、在地石材であるチャートの入手が比較的容易であることから、旧石器時代のみならず、縄文時代においても石器の石材としてチャートが積極的に利用されるという特徴があげられる。反面、遠隔地石材である黒曜石は出土量という点では多いとは言えない。今後、資料数が増加するにしたがって、より詳細な当時の石材利用状況が明らかになっていくことと思われる。本遺跡で出土した当該期の石器は黒曜石製の剥片１点のみであり、全面的な調査による成果ではないため、その具体的な分析は現時点で困難であるが、寺崎台地上に旧石器時代の遺跡が存在する可能性が示されたと言えよう。今後の資料の蓄積に期待したい。

2．縄文時代について

前回調査においては縄文時代の住居１軒を検出しているが、本調査区では土坑のみの検出であった。土坑の分布状況を見ると、標高 59.75 m付近を南限として調査区北部に集中していることが窺える。また、土坑内から出土した縄文土器は、堀之内式が主体であり、前回調査の住居から出土した土器と同様である。本調査区内では、開口部の平面形が正円形を呈する土坑を 25 基検出したが、抽出した土坑以外において時期的な判断が困難であった。このため、本節において土坑の遺物、覆土、形態について検討し、土坑の位置づけを行ないたい。

①遺物

表 11 にあるように、多くの土坑の一括遺物に土師器が含まれる。抽出した土坑のうち、007SK と 029SK においても土師器の小破片が出土している。ここで前回調査の成果を確認すると、本調査区の土坑と同様に、縄文土器と土師器・須恵器が共に出土した土坑９基が検出されており、奈良・平安時代の土坑として位置づけられている。しかしながら、本調査区の土坑と異なる点として、土坑内から出土した遺物の多くが土師器・須恵器で縄文土器が少ない点、ほぼ完形の土師器・須恵器の個体が出土している点、さらに、意図的な廃棄を類推させる出土状況である点の３点が挙げられる。

②覆土

抽出した土坑の覆土について見てみると、ローム粒、ロームブロックを含み、暗褐色もしくは黒褐色を呈し、しまりがやや強い覆土が主体を占める傾向が認められる。この傾向は非抽出遺構の土坑においても認められ、覆土から抽出遺構との時期的な差異を看取することはできなかった。また、土坑内の覆土には、混入を類推させる明確な攪乱や、堆積状況は確認できなかった。

③形態

土坑の形態については、抽出した土坑とそれ以外との間に差異が認められる。抽出した土坑のうち 007SK を除くと、開口部が 1.5 ～ 1.7 m程度の正円形で、断面形状はほぼ箱形、壁は底面付近でわずかながらオーバーハングするという特徴を有する。さらに、土坑の底が鹿沼パミス層下部付近に設けられる点も共通点として挙げられる。これに対して、非抽出遺構の土坑の多くは、開口部の平面形がほぼ正円形を呈することは同様であるものの、５層ハードロームまでの深度であり、壁のオーバーハングも認められない。

上記の検討から、縄文土器と土師器が共に出土した土坑は、形態的特徴と遺物の出土状況を考慮して、縄文時代の土坑として扱わないこととした。ただし、土坑からの出土遺物の多くが縄文土器であるため、本来は縄文時代の遺構であり、少量の土師器は、後世の土地利用に伴って混入した可能性を指摘するに留めたい。

3. 奈良・平安時代について

今回検出した 032SI は、床面よりも上部が削平されており、攪乱により遺構南端も失われていたため、全容の確認は困難であった。出土遺物は土師器の坏、小型甕、須恵器の坏などが認められたが、器種組成を把握するのに充分な資料が得られず、器形全体が窺える資料もわずかであった。時期については、供膳具の様相や、器面調整の手法から、9 世紀第 3 ～ 4 四半期が想定されるが、還元焔焼成が不十分な須恵器が含まれることから、須恵器供給の終末期である 9 世紀第 4 四半期に限定できる可能性は高い。

前回調査においては、住居から 8 世紀～ 10 世紀代の遺物が出土しており、盛期が 9 世紀第 3 ～ 4 四半期と捉えられている。本調査区の 032SI もこの盛期に属する住居であったと考えられる。今後は、寺崎台地上に展開した集落の様相を解明していくことが課題となろう。

以上、各時代ごとに前回調査成果と合わせて概観したが、今回の調査によって、前回調査の補完的な成果が得られた。本調査区は、削平によって遺構の大部分が失われていた上、調査区内を東西軸の耕作痕が多数横断しており、後世の土地利用、改変の影響が著しい。しかしながら、今回の調査によって、当該期に寺崎台地上で積極的な土地利用が行なわれていた可能性は提示できたと言えよう。

参考文献

稲田義弘 2006『新善光寺跡　宍戸城跡―主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書―』茨城県教育財団文化財調査報告第 256 集　財団法人茨城県教育財団

鹿島直樹 2004『石井遺跡群　一般国道 355 号バイパス新設工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第 219 集　財団法人茨城県教育財団

小林達雄 1988『縄文土器大観 4　後期　晩期　続縄文』小学館

佐々木義則 2007「茨城県における奈良・平安時代土器研究の現状」『考古学の深層―瓦吹堅先生還暦記念論文集―』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会

千種重樹 1992『茨城県笠間市寺崎台地遺跡　太平洋観光開発㈱の事務所兼共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』寺崎台地遺跡発掘調査会

西野元ほか 1996『笠間市西田遺跡の研究―縄文時代における石鏃の製作と流通に関する研究―』筑波大学歴史・人類学系

茨城県立歴史館史料部 2006『茨城県立歴史資料叢書 9　茨城の縄文土器』茨城県立歴史館

笠間市史編さん委員会 1993『笠間市史　上巻』笠間市

テイケイトレード株式会社 2010『橋爪遺跡―道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書―』笠間市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	みねさきいせき
書名	峯崎遺跡
副書名	福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	望月大輔
編集機関	テイケイトレード株式会社
住所地	〒160-0021　東京都新宿区歌舞伎町１－１－16　テイケイトレード新宿ビル８Ｆ TEL　03-5155-0391
発行年月日	2011年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みねさきいせき 峯崎遺跡	いばらきけんかさまし 茨城県笠間市 てらさき あざ みねさき 158ほか 寺崎 字 峯崎 158外	08321	016	36°23′42″	140°15′22″	2011.02.01 ～ 2011.02.25	329㎡	福祉施設建設に伴う遺跡の発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構	主な遺物	特記事項
峯崎遺跡	集落跡 （包蔵地）	旧石器時代		剥片	縄文時代後期前葉の土坑を検出した。関東ローム層より旧石器時代の石器が１点出土した。
		縄文時代	土坑　12基 ピット　1基	縄文土器・石器	
		平安時代	住居　1軒 屋外炉　1基	土師器・須恵器	
		時期不明	16基（総計31基）		

要約	縄文時代の土坑、平安時代の住居、屋外炉を検出した。縄文時代の土坑からは堀之内式を中心に、後期前葉の土器が出土した。また、平安時代の住居からは9世紀第3～4四半期の土師器と須恵器が出土した。後世の削平が調査区内全域にわたってローム層まで及び、遺構の上部は失われている。

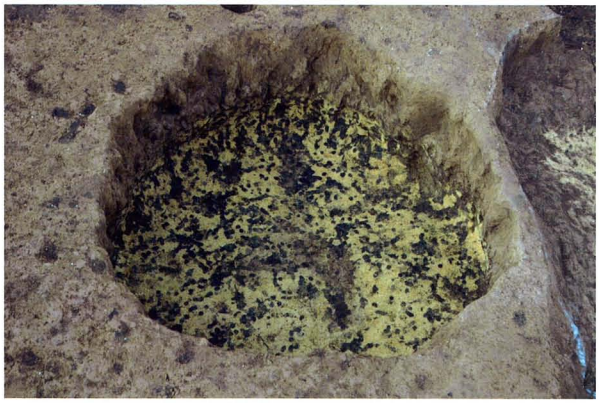
調査区全景（東から）

基本層序 A（西から）

基本層序 B　3～8 層（東から）

旧石器時代　石器出土状況（北から）

写真図版２



006SK　完掘（南から）

007SK　完掘（東から）

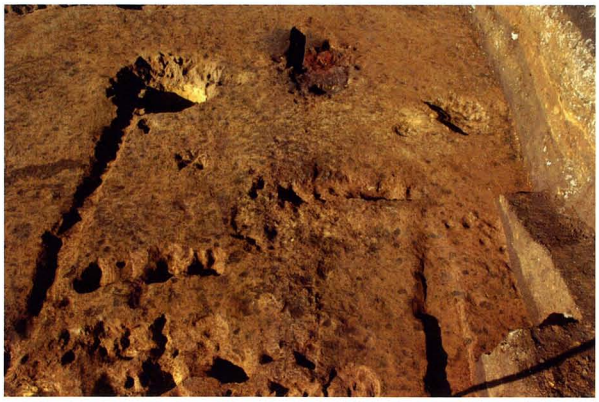
016SK　遺物出土状況（南から）

016SK　完掘（南から）

029SK　土層断面（南から）

029SK　完掘（南から）

028SL　完掘（南から）



032SI　完掘（南から）

旧石器時代　石器

006SK-2

007SK-2

016SK-1

016SK-2

019SK-1

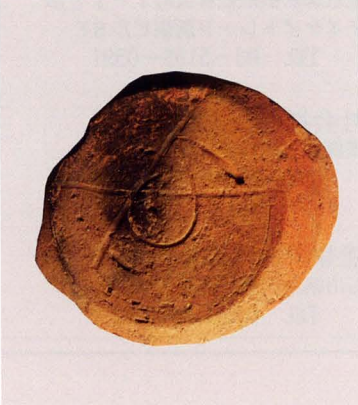
029SK-1

非抽出遺構・遺構外出土 -1

非抽出遺構・遺構外出土 -2

非抽出遺構・遺構外出土 -5

032SI-1



032SI-2

032SI-4

032SI-6

茨城県笠間市

峯崎遺跡

—福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011年5月31日

編集　テイケイトレード株式会社
東京都新宿区歌舞伎町１－１－16
テイケイトレード新宿ビル８F
TEL　03－5155－0391

発行　社会福祉法人木犀会
茨城県笠間市鯉渕6266－185
TEL　0296－78－1133

印刷　能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵町7-10
TEL　076-233-2550